☆年間第19主日（8月7日）の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読　（知恵の書 18 章 6-9 節）

あの過越の夜のことは、我々の先祖たちに前もって知らされており、彼らはあなたの約束を知ってそれを信じていたので、動揺することなく安心していられた。神に従う人々の救いと、敵どもの滅びを、あなたの民は待っていた。あなたは、反対者への罰に用いたその出来事で、 わたしたちを招き、光栄を与えてくださった。 善き民の清い子らは、ひそかにいけにえを献げ、神聖な掟を守ることを全員一致で取り決めた。 それは、聖なる民が、順境も逆境も心を合わせて受け止めるということである。 そのとき彼らは先祖たちの賛歌をうたっていた。

第二朗読（ヘブライ人への手紙 11 章 1-2, 8-19 節）

皆さん、信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。 昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に 出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。信仰によって、アブラハムは他国に宿るようにして約束の地に住み、 同じ約束されたものを共に受け継ぐ者であるイサク、ヤコブと一緒に幕屋に住みました。 アブラハムは、神が設計者であり建設者である堅固な土台を持つ都を 待望していたからです。 信仰によって、不妊の女サラ自身も、年齢が盛りを過ぎていたのに 子をもうける力を得ました。 約束をなさった方は真実な方であると、信じていたからです。 それで、死んだも同様の一人の人から空の星のように、 また海辺の数えきれない砂のように、多くの子孫が生まれたのです。

［この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。 約束されたものを手に入れませんでしたが、はるかにそれを見て喜びの声をあげ、 自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。 このよう

に言う人たちは、自分が故郷を探し求めていることを 明らかに表しているのです。 もし出て来た土地のことを思っていたのなら、 戻るのに良い機会もあったかもしれません。 ところが実際は、彼らは更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。 だから、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさいません。 神は、彼らのために都を準備されていたからです。
信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクを献げました。
つまり、約束を受けていた者が、独り子を献げようとしたのです。 この独り子については、「イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる」と言われていました。 アブラハムは、神が人を死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです。 それで彼は、イサクを返してもらいましたが、それは死者の中から返してもらったも同然です。]

福音朗読（ルカ 12 章 32-48 節）

　そのとき、イエスは弟子たちに言われた。「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。 自分の持ち物を売り払って施しなさい。 擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい。 そこは、盗人も近寄らず、虫も食い荒らさない。 あなたがたの富のあるところに、あなたがたの心もあるのだ。」
「腰に帯を締め、ともし火をともしていなさい。 主人が婚宴から帰って来て戸をたたくとき、 すぐに開けようと待っている人のようにしていなさい。
主人が帰って来たとき、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。
はっきり言っておくが、主人は帯を締めて、この僕たちを食事の席に着かせ、そばに来て給仕してくれる。 主人が真夜中に帰っても、夜明けに帰っても、目を覚ましているのを見られる僕たちは幸いだ。 このことをわきまえていなさい。 家の主人は、泥棒がいつやって来るかを知っていたら、 自分の家に押し入らせはしないだろう。 あなたがたも用意していなさい。 人の子は思いがけない時に来るからである。」
　そこでペトロが、「主よ、このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか。 それとも、みんなのためですか」と言うと、 主は言われた。「主人が召し使いたちの上に立てて、時間どおりに食べ物を分配させることにした

忠実で賢い管理人は、いったいだれであろうか。 主人が帰って来たとき、言われたとおりにしているのを見られる僕は幸いである。 確かに言っておくが、主人は彼に全財産を管理させるにちがいない。 しかし、もしその僕が、主人の帰りは遅れると思い、 下男や女中を殴ったり、食べたり飲んだり、酔うようなことになるならば、 その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、 彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。 主人の思いを知りながら何も準備せず、 あるいは主人の思いどおりにしなかった僕は、ひどく鞭打たれる。 しかし、知らずにいて鞭打たれるようなことをした者は、打たれても少しで済む。 すべて多く与えられた者は、多く求められ、 多く任された者は、更に多く要求される。」

朗読解説　―主任司祭より皆様へ―

皆さまお元気でいらっしゃいますか。ここ二三日は東京も少し暑さが和らいでいますね。ありがたいことですが、新潟県や福井県などでは土砂災害が発生して大変厳しい状況になっています。コロナ感染症も東京では3万人を超える勢いで、あちこちから感染の情報が伝わってきます。また、海外では侵略戦争やミサイル発射の軍事訓練、人権弾圧がこれ見よがしに行われ、人類は少しも進歩していないことが実証されています。本当に残念な悲しい現実です。私たちの平和への祈りが足りないのでしょうか。イエスは「求めなさい！」と呼び掛けておられます。根気強く平和を求めていきましょう。

第一朗読　（知恵の書 18 章 6-9 節）

今日読まれる知恵の書は神の知恵のすばらしさ、その驚くべきすごさを物語っています。イスラエルを救い出したエジプトでの出来事は、世々に語られ、イスラエルの民の確信となっていきます。その過ぎ越しの出来事はエジプトの圧政者に対しては滅びでしたが、イスラエルの民にとっては奴隷状態からの解放であり、自由の獲得だったのです。イスラエルの民はモーセを通して「神の約束を知り、信じて」その出来事の実現を待っていたのです。

この出来事は現代の私たちにも当てはまるのです。世界の出来事に振り回されている私たちですが、神は決して私たちを見捨てることなく神の国を実現されるのです。

第二朗読（ヘブライ人への手紙 11 章 1-2, 8-19 節）

「信仰とは、望んでいることを確信し、見えない事実を確認することです。」とパウロは私たちに語っています。アブラハムの信仰がその代表的なものと言われていますが、現在私たちが知っている多くの聖人、殉教者たちはそのアブラハムの列に連なる人たちなのです。アブラハムも聖人殉教者たちも信仰による救いの事実を確かに確信していたのです。それは時間とともに実現するはずのものでした。救いの事実が現実となることを信じて待っていたのです。私たちも神の国の平和が実現することを信じ祈りながら待つことが必要なのです。

福音朗読（ルカ 12 章 32-48 節）

「腰に帯を締め、ともし火を灯して、目を覚まして主人の帰りを待ちなさい。」とイエスは言われます。そうすればその主人は帰ってきて、主人自ら帯を締め、僕たちにねぎらいの食事の給仕をしてくださるのです。そのように私たちの天の父は喜んで私たちに神の国をくださるのですとイエスは言われます。私たちの神、父、主人は私たちに理不尽な要求をなさる方ではなく、私たちの思いを超えたもてなしをしてくださる方なのだとイエスは言われます。当時のイスラエルの人々にとって神とは律法によって人々を裁く神の概念が強くありましたが、イエスはこのような神の概念を打ち砕く父なる神、憐み深い、慈しみの神を私たちに教えてくださったのです。ですから神は私たちの希望、望みを打ち砕かれる神ではなく、私たちの希望、望み以上の幸せを与えようとされる神なのです。この神の慈しみを信じ、確信しながらその実現を待ちましょう。

クレオメの花

P.S.

　この一週間は「日本カトリック平和旬間」です。広島、長崎の原爆被害を偲びながら現在の世界事情を思い、平和の実現のためのロザリオの祈りを捧げましょう。また、危険な暑さが続きますので、体調管理に努めましょう。

カトリック足立教会

主任司祭　野口重光